

「영영 여름」 정이현

2016. 10. 09

担当：池口小織

【作家：정이현】

1972年ソウル特別市生まれ。ソウル芸術大学文芸創作学科卒。2002年短編小説「낭만적 사랑과 사회 (ロマン的愛と社会)」にて2002年第1回「文学と社会」 新人文文学賞を受賞し、デビュー。以降、2004年「他人의 孤独」で第5回李孝石/イ・ヒョソク文学賞を、短編「삼풍백화점 (三豊百貨店)」で第51回現代文学賞を受賞、人気作品「달콤한 나의 도시 (マイルスウィートソウル)」、「오늘의 거짓말 (今日の嘘)」、「풍선 (風船)」、「말하자면 좋은 사람 (言うなればいい人)」などがある。

「マイルスウィートソウル」は朝鮮日報に連載され、爆発的な人気となったチョン・イヒョンの最初の長編小説だ。2,30代の女性たちの共感を呼び起こした作品として、人生のターニングポイントを迎えた人々の風景を軽快ながらも鋭く描き出した。←日本語訳版2007年出版(清水由希子訳)

「三豊百貨店」は、すでに韓国人の記憶から薄らいできた、三豊百貨店崩壊事件(1995.6.29)を扱った小説。

(YES24 作家紹介 参考)

::代表作::

타인의 고독(2004) 너는 모른다(2009) 달콤한 나의 도시(2006)

말하자면 좋은 사람(2014)

【영영 여름 概要】

12才の少女、主人公ワタナベリエは、貿易会社の海外営業担当である父の仕事の都合で東京に暮らす。母は専業主婦。日本人の父とは日本語で話し、韓国人の母とは韓国語で話す少女は、過干渉な母親によって執拗なまでの体重管理を強いられる生活の中、家庭でも、行く先々の国々のインターナショナルスクールでも居場所が見つからずにいた。13才の11月、家族で引っ越した先の都市Kで、唯一心を開くことのできる友人メイに出会う。初めて他人との接点を持ち、自分らしさを出すことのできたメイとは、「母語」である韓国語での意思疎通が出来た。ところが彼女は北朝鮮の出身であることを知り、母の干渉を受ける。心の落ち着く場所が見つからず、アイデンティティを求め続けた少女が過ごした、ほろ苦いひと夏の記憶。

【登場人物】

ワタナベリエ 12才～13才

父 日本人 貿易会社海外営業担当

母 韓国人 韓国に赴任中の父と出会い、結婚。専業主婦。

メイ 南太平洋付近の小さな町で出会う少女。リエと同学年。

【時間、場所の流れ】

12才～13才 11月まで 東京 町外れの小さな2DKのアパート

13才11月から 南太平洋付近 都市Kへ転居 プールつき高級マンション高層階 プール、海が一望できる部屋

【主な出来事】

前半／東京：インターナショナルスクールでは、体型をからかわれ、ブタというあだ名で呼ばれる孤独な少女。家庭では、リエの体重を気にする母の過干渉に苦しめられ、心の休まる場所がない。

中盤～後半／K：引っ越した街のインターナショナルスクールでは、pretty girlと教師に声をかけられ、クラスではあだ名もつかない。クラスメイトの中の中国人だと思い込んでいた少女がこぼした미치짚다という韓国語を聞き逃さず、徐々にリエとメイは互いに親みを抱き始める。何度か昼食の弁当を交換して食べたりしするが、その後、不可抗力でおこった事故で、リエはメイに怪我をさせてしまう。この日をきっかけに、メイは姿を見せることはなくなってしまう。

【気になる表現・単語】

－タイトル영영 여름을どう訳すか？

ロングロング サマー

永遠の夏

長い、長い、夏。

いつまでも夏

(語感の持つ軽快さを残したい) →訳者の感性、好みでO.K!

－母国語とは？

文中で모국어とあるが、主人公ワタナベリエにとっての母語が“韓国語”とされている。

日本語訳は「母語」でよいか、「韓国語」がふさわしいか。

→「母語」と「韓国語」を、文脈に応じて使い分けることが必要

【気になる表現・単語続き】

P318 나직이 울조린 소리

→蚊の泣くような声

P319 하지만 두 언어를 맞교환하도록 매개하는 것은

→間に立って通訳することは

P321 그 조건문의 방점은 뒤쪽이 아니라 앞쪽에 찍혀 있음을 알 수 있었다.

→強調されたのは、条件文の方だった

P325 이들은 같은 호수에서 헤엄치는 서로 다른 종의 가금류들 처럼 보였다.

→彼らはまるで湖で泳ぐカモやアヒルのようだった

翻訳練習

【プロローグ】

豚ほどきれい好きで敏感な動物はいないって内容の絵本を、ずいぶん前に読んだことがある。豚は食べたくないものは絶対に口にしないし、低く湿ったところに排泄すると決めている。排泄は別の場所と、分けているってこと。また、この上なく従順。相手がちょっかいを出さない限り、豚から先に攻撃はしない。豚には罪がない。何よりも印象的なのは、豚は、他の豚と区別されないことを、最も嫌がるという節だった。それは私の胸に、とても悲しく、そして美しい文章として刻まれた。

【石なごあそびの場面】 P333

7回目に一緒にごはんを食べた後、メイがかばんから何かを取り出した。ぴかぴかした白い小石が全部で五つ。「見たことある？」メイが尋ねた。石でしょって返した。コンギ（韓国語で空気の意）っていうと、AIR？メイが四方を見渡した。メイの手は小さく、指は細くて丸っこい。メイはまず、小石を机の上にきちんと置くと、1つを垂直に高く投げた。1つが空中でびたりと留まった途端、他の4つのうちのひとつをすぐさま掴み、落ちてくる小石と一緒にキャッチした。こうして1つ、2つ、3つ、4つ、5つの小石がメイの握りこぶしの中にまた集まった。切った！今度、メイはその5つをいっぺんにポーンと投げたと思ったら、手の甲で受け止めた。そしてまた手の甲から跳ね上げて、手をひっくり返し、ブーンと飛び上がった5つの小石はまたメイの小さな手のひらに安全に帰還した。私はぼか

んと口を開けて、メイのスゴ技に見入った。それは小石とコンギ（空気）と人間とが共に繰り広げる美術的一幕のようだった。

リエは私より上手に出来るよ。手が大きいもん。メイが小石を差し出した。さっきよりつやが出ていた。小石を手にとると、暖かい触感だった。メイみたいに、1つを上に向かってポーンと投げた。なにをする間もなく石は垂直に落下して、机の下に転がり落ちた。私たちはキャッキヤと声を上げて笑った。何事も、粘り強く続けるほど、実力が伸びるという言葉は、ほとんどの場合正しいものだ。私の石なごあそびの実力も、すばやく向上した。ある時は2つ掴み、3つ掴みしたりもした。学期が中盤に差し掛かった頃、ごくたまに、メイに勝ったりもした。お昼を食べ終えたほかの子達も、自然に私たちの周りに集まった。クロイとジェシーも加わって、2対2で組になってゲームしたこともあった。切った！してから石を空に向かって投げる間、拍手1回で10年ずつ年をとるっていう、石なご遊びのルールを知った。3回叩くと30年、5回叩くと50年。拍手を何度もした私たちが、共に分かち合った時間、いったい全部で何年になるのかな。千年、万年、十万年？

複式競技になると、クロイとジェシーがいつも負けた。それなら混ぜるのはどうって、メイがアイデアを出した。実力が同じようになるだろうし、公平だよって。私はメイと別のチームになるのがなぜか不安だったけれど、みんな嬉しそうだったから、なんとなく流れに乗った。

クロイとメイ、ジェシーと私がチームを組んだ。その日、メイはひときわびょんびょん飛び跳ねていた。小石を手にするるとすばやく動き、数える力も活気に満ちていた。切った！してる間、メイは何度も拍手をした。1つ、2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ。わあ、上手だなんて思うのと同時に怖いなって思った。そして私の手がふざけたみたいに彼女の肩にそっと、わずかにそっと触れた。拍手するかしないかの瞬間、メイはぐらりと重心を失った。拍手しようと、視線が虚空に留まったせいだろう。私が持って生まれた強い握力をつい見過ごしたせいでもあった。メイは横向きに転び、転んだ先の机の上にほんのわずかに飛び出していた釘が、彼女の額の真ん中に突き刺さった。額から血がふきだした。学校の保健の先生が処置できるレベルじゃなかった。先生たちが私を救急車に乗せたのは、加害者だからではなく、ひどく悲痛にこわばって泣く私の心理的ショックが心配だったからだった。

※緑色にした文字の部分は、読書会の皆さんと熟考した上の翻訳です。また、以下のエピソードは、読書会の皆様による翻訳です。

【エピローグ】

その日の夕方、私は砂浜に座り海をみつめていた。日が沈みかけた海は、すべてを飲み込むように、限りなく静かだった。ゆっくりと日が傾いていった。いくつ季節が過ぎても、ここでは真夏だった。最後の瞬間まで、永遠に夏だろう。Kの言葉で「豚」が何かはまだ分からない。私はあだ名さえない女の子だ。壊れやすいもの、壊れないものについて考えているうち、日がすっかり沈んでいた。暗い空、太陽があった痕跡みたいに、透明な円のリングが残った。ある秘密を知るためには、しばらく留まらなければならないことを知った。目を細め、私は空をぐっと引き寄せた。両手を高く持ち上げて、宙で手のひらをぶつけ合わせた。パチン！一回。もう一回、パチン！一瞬で20年が過ぎ去った。沈黙だけ残った未来で、私は闇と溶け合うまで座っていた。

その日の夕方、私は砂浜に座り海をみつめていた。日が沈みかけた海は、すべてを飲み込むように、限りなく静かだった。ゆっくりと日が傾いていった。いくつ季節が過ぎても、ここでは真夏だった。最後の瞬間まで、永遠に夏だろう。Kの言葉で「豚」が何かはまだ分からない。私はあだ名さえない女の子だ**った**。壊れやすいもの、壊れないものについて考えているうち、日がすっかり沈んでいた。暗い空、太陽があった痕跡みたいな**な**透明な**円形**のリングが残った。**なにかの秘密を知るためには、ここにしばらくいなくてはならないと思**った。目を細め、私は空をぐっと引き寄せた。両手を高く**上げて、空中**で手のひらを**合**わせた。パチン！**と**一回。もう一回、パチン！一瞬で20年が過ぎ去った。沈黙だけ残った未来で、私は闇と溶け**あ**うまで座っていた。